

# エネルギー事情を次世代と共に学ぶ 交流事業参加報告

## The Report of Learning-About- Energy with Young Generation Program

三 浦 文 恵

**要約** 本報告は、平成27年度並びに28年度に青森県六ヶ所村の女性団体「エネルギーを考える未来塾」が、経済産業省資源エネルギー庁に委託を受けた一般財団法人日本立地センターによる助成事業「エネルギー事情を次世代と共に学ぶ～首都圏の女子大生と地元の学生、函館の学生、津軽下北の女性の集い」に、本学の学生が参加した実践の記録である。事業の継続に関しては今後に委ねるとして、ここに2年に渡る活動を振り返り、課題と成果を検証する。

### 1 は じ め に

この実践記録は、平成27年度並びに28年度に行なわれた「エネルギー事情を次世代と共に学ぶ～首都圏の女子大生と地元の学生、函館の学生、津軽下北の女性の集い」事業に本学の学生が参加し、他の地域の学生や地元市民団体との交流を通してエネルギーについて考えるきっかけとなった活動の記録である。

エネルギー関連施設の立地が進む青森県では、六ヶ所村を軸に県内で各種エネルギー勉強会や広報活動が行なわれているが、地域毎・

対象毎に区切って実施されることが多かった。

本事業を主催した六ヶ所村の女性団体「エネルギーを考える未来塾」は、2012年より各地のエネルギー関連施設見学や勉強会への参加、他団体との交流を通して、エネルギーへの関心や理解を深める活動を行っている。

この「エネルギー事情を次世代と共に学ぶ」事業では、地元六ヶ所村のみならず、青森県内他地域、下北半島のエネルギー施設に大いなる関心を寄せる函館地域、エネルギー大

消費地の首都圏より、次世代を担う若い学生に実情を見てもらい、更に地元の市民団体と交流・意見交換する事で次世代の日本のエネルギーについて関心をもち理解を深めてもら

おうという、地域や世代の枠組みを超えた初の試みであった。

よって、その内容を記録に留め、活動実績を考察・検証するものである。

## 2 活 動 内 容

### 1) 参加者

(平成 27 年度)

・学生	十文字学園女子大学	9名
	北海道教育大学函館校	2名
	八戸学院短期大学	18名
	計	27名
・教員		4名
・市民団体		
	エネルギーを考える未来塾	10名
	むつ市女性団体協議会	10名
	はまなすクラブ大間地区	3名
	はまなすクラブ佐井地区	5名
	スカーフクラブあおもりサロン1	3名
	東通村連合婦人会	2名
	会場 (スワニー)	6名
	読書愛好会	3名
	計	52名
・自治体		
	下北県民局	1名
	六ヶ所村	3名
・エネルギー事業者		
	原子力規制庁	3名
	日本立地センター	1名
	東通原子力発電所	2名
	新むつ小川原 (株)	1名
	日本原燃	10名
・各種団体		

NPO あすかエネルギーフォーラム	2名
六ヶ所村文化協会	2名
・一般参加	
六ヶ所村	3名
弘前市	3名
おいらせ町	1名
むつ市	1名
野辺地町	1名
・その他	6名
合計	125名

(平成 28 年度)

・学生	十文字学園女子大学	5名
	北海道教育大学函館校	2名
	弘前大学	2名
	青森中央学院大学	2名
	八戸工業大学	2名
	八戸学院短期大学	2名
	計	10名
・教員		7名
・市民団体		
	エネルギーを考える未来塾	16名
	NPO あすかエネルギーフォーラム	2名
・その他		
	各種団体	40名
合計		75名

## 2) プログラムの内容

平成 27 年度並びに 28 年度ともに 2 日間に渡って行なわれ、1 日目は施設見学と交流会、2 日目はエネルギー・フォーラムとして基調講演、テーブル・トーク、意見発表といった内容であった。

平成 27 年度

1 日目 9 月 10 日（木）

13～16 エネルギー関連施設見学

- ・原燃 PR センター見学
- ・核燃料サイクル施設見学
- ・自然再生エネルギー施設見学  
（風力発電用風車・太陽光パネル設置場所）

16～17 六ヶ所村内見学

17～19 交流会（ろっかぼっか）

1 日目最初の原燃 PR センターは、北海道・埼玉・八戸からの参加学生 27 名、教員 4 名、あすかエネルギーフォーラム 2 名、エネルギーを考える未来塾生 5 名、日本立地センター 1 名、資源エネルギー庁 2 名、日本原燃株式会社 3 名の計 44 名が、まず日本原燃の



図 1 原燃 PR センター内見学の様子

事業について概要説明を聞いた後、約 1 時間に渡り PR センター内をガイドの説明と共に見学した。

PR センターでは、ガイドの案内で放射線や自然界の放射性物質についての一般的な知識を学んだ後、日本原燃再処理施設内に入り見学した。

八戸学院短期大学生は、事前に日本立地センターが発行する情報誌「サイクル・アイ」に六ヶ所村でのエネルギー関連施設が記事として取り上げられた第 1～4 号までを読み、ある程度の予備知識を得てはいたが、実際に見学する事で更に知識を深められたようだ。特に、普段立ち入る事ができない再処理施設内の見学は全員初めてであり、地元の若者として考えることが多々あったようである。

1 日目夜はスパハウスろっかぼっかで交流会が開かれ、主催者であるエネルギーを考える未来塾事務局の司会のもと、塾長による主催者挨拶、参加大学の教員より各大学の紹介、NPO あすかエネルギーフォーラムの挨拶等が行われ、テーブル毎に交流を深めた。

2 日目 9 月 11 日（金）

10～11 基調講演 松本 真由美氏

「日本のエネルギー事情と未来のエネルギー」（東京大学教養学部 附属教養教育高度化機構 環境エネルギー科学特別部門 客員准教授）

11～12 原子力関連施設見学会報告（エネルギーを考える未来塾）

13～15 テーブル・トーク、発表

基調講演では、「日本のエネルギー事情と

未来のエネルギー」と題し、松本真由美氏が震災前の日本のエネルギー事情、地球温暖化問題、海外のエネルギー事情、未来のエネルギーを考えるの4項目について講演を行った。

はじめに、人間が利用するエネルギーのうち変換加工前の自然界に存在する石油・石炭・天然ガス・ウランといった1次エネルギーから、電力・都市ガス・燃料油等に加工された2次エネルギーの基礎知識の説明の後、東日本大震災によってエネルギー政策が見直しをされ、基本的視点3E+S「安定供給(エネルギー安全保障)」「コスト低減(効率性)」「環境負荷低減」を追求・実現し「安全性」を前

提とする第4次エネルギー基本計画が2014年4月に閣議決定され、原子力を重要なベースロード電源と位置づけ再生可能エネルギーを推進する指針が紹介された。

その上で、震災後停止された原子力発電を補うため追加の火力燃料調達費用が拡大し電気料金上昇につながっていること、火力発電所の老朽化、CO<sub>2</sub>排出増加等の地球温暖化問題に影響を与えていると説明。これらの問題を解決するために導入が進んだ再生可能エネルギーは、送電線や立地等に伴う高コスト、それに自然状況に大きく左右される供給リスクの問題が普及への大きな課題であるとした。

また、原子力政策転換を図る欧州諸国やエネルギー需要が飛躍的に高まっている中国・インドといった新興国の状況、海外でのシェールガスやメタンハイドレード等の非在来型エネルギーの開発、日本での電力全面自由化、石炭火力発電所新設計画による課題が示され、これら経済性・安全性・リスクを考慮した日本の将来の多様なエネルギーミックスを検討していく必要性が示された。

その後、主催団体であるエネルギーを考え

首都圏の女子大生と地元の学生、函館の学生、津軽下北の女性の集い

## エネルギー事情を次世代と共に学ぶ!

日時：平成27年9月11日(金) 10時00分～  
場所：六ヶ所村文化交流プラザ・Sウニー  
〒991-8501 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駈字柳井1-8 TEL0175-72-3400

基調講演 10時15分～  
演題「日本のエネルギー事情と未来のエネルギー」  
講師 松本 真由美氏  
東北大学 教養学部 附属教職教育高度化機構  
環境エネルギー科学特設部門 客員准教授

■ 概要  
現在生まれ、上野大学外国語学部卒業。専門は環境/科学技術コミュニケーション。研究テーマは「科学コミュニケーション」「エネルギーと地域社会」等。環境とエネルギーの境目から社会の持続可能性のあり方を考える。大学で学んだ分野の知識を地域で生かす。リポーター、ディレクターとして取材活動を行い、その後、NHK E1ワールドニュース・キャスターとして「ワールドレポート」等の番組に出演している。2008年より東京女子大学において環境・エネルギー分野の研究および教育活動に携わる。大学での活動の一方、講演、シンポジウム、執筆など幅広く活動する。NPO法人・国際環境教育機構 役員 理事も務める。

日程  
10:00 開会  
10:15 講演 演題「日本のエネルギー事情と未来のエネルギー」  
講師 松本 真由美氏  
11:00 報告 原子力関連施設見学会報告  
12:00 アトラクション  
13:00 テーブルトーク 司会進行 和泉優子氏 (あすかエネルギーフォーラム共同主催)  
15:00 閉会

主催 エネルギーを考える未来塾  
後援 六ヶ所村、六ヶ所村教育委員会、むつ市女性団体連絡協議会  
協力 あすかエネルギーフォーラム  
問合せ・参加申込先 0175-74-2917 事務局 伊藤夏子  
(申込締切：平成27年8月25日まで)

【この事業は経済産業省資源エネルギー庁が一般財団法人日本立地センターに委託して実施。】

図2 「エネルギー事情を次世代と共に学ぶ～首都圏の女子大生と地元の学生、函館の学生、津軽下北の女性の集い」チラシ



図3 テーブル・トークの様子



る未来塾が、六ヶ所村再処理施設周辺の戸西方断層を視察した報告を行った。

昼食後、事業者と一般参加者を除く学生と市民団体の参加者が7、8人ずつ9グループに分かれ、参加大学の教員が各グループの助言者となって、テーブル・トークを行った。グループ毎に、テーマ1：基調講演の感想、テーマ2：エネルギー問題を考える視点は何か、テーマ3：私が考える未来のエネルギーに沿って作業を進めた。

各グループではそれぞれ最初に自己紹介し、発表者や書記等の役割を決めた後、テーマ1～3の順に自分の考えをポストイットに書いて貼り出し、各自が自分の考えを説明、模造紙に全体としての意見をまとめ書き出した。

その後、各グループが全体に向けて意見発表を行なった。

テーマ1の「松本真由美氏の基調講演を聞いて」の学生の感想をグループ毎に紹介する。

#### 1グループ

- ・日本のエネルギー自給率が6%という事を初めて知った。
- ・電力全面自由化と非在来型のエネルギーが導入された際のメリット・デメリットを知った。

#### 2グループ

- ・日本のエネルギー自給率の低さに驚いたと同時に、エネルギーについて考えることができた。
- ・経済とエネルギーは密接な関係があるとよくわかった。

#### 3グループ

- ・日本は海外からの（エネルギー資源）輸入

がなければ成り立つことが難しいということがわかった。

- ・メタンハイドレードという資源があることを知った。

#### 4グループ

- ・CO<sub>2</sub>の排出量が地球温暖化につながっているということがわかった。
- ・日本のエネルギー自給率6%は低い、震災前の目標は20%、2030年には25%を目指す。

#### 5グループ

- ・再生可能エネルギーを増やすべきだが、太陽光発電の送電線の能力不足など問題点も多く、エネルギー量を増やしコストが低くなる方法を探るべきではないか。
- ・原発による廃棄物の完璧な処理はどうなるのかという問題がある。

といった意見が出た。

次に、テーマ2の「エネルギー問題を考える視点について」では、

#### 1グループ

- ・限りある資源（石油・石炭）を考える。
- ・生活に必要不可欠なエネルギーだから需要を減らしていく。



図4 発表の様子



図5 2015/9/20付 東奥日報記事

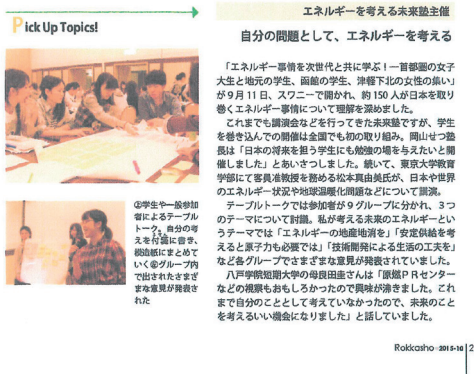


図6 出典：広報ろっかしよ 2015/10月号より

2 グループ

- ・地球温暖化 CO<sub>2</sub> の問題から考える。
- ・感情論を排除した科学的に冷静なコンセンサス。

3 グループ

- ・一つの発電方法に頼らず、幅広くバランスよく発電する。
- ・エネルギーのメリット、デメリットを考慮して効率のよい方法を見つけ出す。

4 グループ

- ・見て聞いて知ることが不安をなくし大切。
- ・エネルギーは出力が安定し CO<sub>2</sub> を排出しないことが大切。

5 グループ

- ・安全安定供給とコストの問題。
- ・太陽光や風力は寿命が短い、人口減少でどうするか。

などが出た。

そして、テーマ3の「私が考える未来のエネルギー」では、

1 グループ

- ・その土地に合った発電をしてそこで消費するエネルギーの地産地消。
- ・再生エネルギー、メタンハイドレード、プラズマ核融合に期待する。

2 グループ

- ・化石資源を使わない再生可能エネルギーと原子力のミックス。
- ・食品の残り物を利用したエネルギー。

3 グループ

- ・自然エネルギーで自給率を向上しつつ発電コストを抑えたエネルギー。
- ・燃料費が安い原子力の割合を高め、様々なエネルギーをバランスよく使う。

4 グループ

- ・より技術革新した風力、太陽光への期待。
- ・川が多い日本ならではの水力。

5 グループ

- ・逐電施設の開発。

・海、雷、人力でエネルギーを作る技術。  
などの意見が出た。

そして、それぞれのグループがまとめた意見を発表した。

平成 28 年度

1 日目 9 月 2 日（金）

13～17 エネルギー関連施設見学  
・ 原燃 PR センター見学  
・ 核燃料再処理施設見学  
・ 環境管理センター見学

17～19 交流会（ろっかぼっか）

2 日目 9 月 3 日（土）

10～11 基調講演 日景 弥生 氏

**首都圏の学生、地元の学生、一般市民の集い！**  
**エネルギー事情を次世代と共に学ぶ！**

日時：平成28年9月3日(土) 10:00～15:00  
会場：六ヶ所村文化交流プラザ・スワン大会議室  
〒981-8502 宮城県大崎市大石町1-8 TEL0175-72-3400

**基調講演** 10時15分～  
演題「あなたは どう思う？日本のエネルギー」  
講師 日景 弥生 氏  
仙前大学 学長特別補佐・教育学部教授

**プロフィール**  
1981年10月に仙前大学に赴任。  
2011年より仙台大学教育学部教授。  
現在は、仙前大学男女共同参画推進委員も兼任。  
仙台大学「仙台大学女子学生センター」の理事。  
専門は幼児教育学および家庭科教育。博士（学術）  
2015年現在、仙前大学初の女性学長として、学長特別補佐に兼任、生涯と職業などに関する講演を行っている。

**日程**  
10:00 開会  
10:15 基調講演 テーマ「あなたは どう思う？日本のエネルギー」  
講師 日景 弥生 氏  
11:00 報告 エネルギーを考える未来塾の活動報告  
11:15 講話 演題「身の周りの放射能・放射線～過去・現在・未来～」  
講師 石口 孝治 氏  
元東京大学大学院 研究員 現放送大学教養学部 講師  
司会進行 三浦 孝一 氏（事務局）  
12:45 ワークショップ  
15:00 閉会

主催 エネルギーを考える未来塾  
後援 六ヶ所村、六ヶ所村まちづくり協議会、むつ市女性団体連絡協議会  
協力 NPO法人あすかエネルギーフォーラム

問合せ・参加申込先 0175-74-2917 塾長 伊藤 夏子  
(申込締切：平成28年8月20日まで)

※「この事業は一般財団法人日本立地センターが経済産業省資源エネルギー庁の委託を受けて行っている事業です。」

図7 「エネルギー事情を次世代と共に学ぶ！首都圏の学生、地元の学生、一般市民の集い！」チラシ

「あなたは どう思う？日本のエネルギー」

（弘前大学教養学部教授）

11～11:15 活動報告

（エネルギーを考える未来塾）

11:15～11:45 講話 石口 孝治 氏

「身の周りの放射能・放射線～過去・現在・未来～」

（放送大学教養学部講師）

11:45～12 放射線測定（砂、野菜、牧草）

13～14 テーブル・トーク

14～15 発表、総括

今年度の日景氏の基調講演では、「あなたは どう思う？日本のエネルギー」と題して、脱原発・再生可能エネルギーに舵を切ったドイツと日本の現状を比較して、今後の課題・問題点について探った。

はじめに、日本とドイツそれぞれの国情について、人口・気候・地理的状況・資源に観点から比較した。特に、エネルギー政策に大きな影響があるとされる地理的状況では、四方を海に囲まれた島国の日本に対し、ドイツは諸外国と大陸続きであること、資源に乏しくエネルギー自給率6%である日本に対し、褐炭・石炭が豊富でエネルギー自給率41%のドイツは夏が涼しいため、猛暑で冬は寒い日本の気候ほど季節変動によるエネルギー需要度は高くないことなどが紹介された。その上で、総体的なエネルギー消費量は若干ドイツが高い位でさほど変わらないものの、日本は東日本大震災後の原子力の落ち込みで石油が高率(41%)でドイツは再生可能エネルギー(11%)の割合が高くCO<sub>2</sub>排出量も段階的に削減してきていること、税金や再生可能エネ



ルギー買取価格が日本より高額なドイツでは、電気料金が日本より割高になっていると説明。再生可能エネルギーを推進するにあたってバックアップ電源確保の必要性や電源需要に対応した電源構成が重要な課題となる中、ドイツの電力需要は南側、電源は北側に偏在し、送電網はドイツ全体を網羅していないことが明かされた。ただドイツは近隣諸国からエネルギーの購入が可能であるのに対し、同じく送電網整備の問題を抱える日本は自国でエネルギー問題を解決する必要がある、CO<sub>2</sub> 排出量削減問題と併せて早急な対応が求められている。

また、テーブル・トークへの話題提供として、来年アメリカで稼働予定のCO<sub>2</sub> 除去装置や、日本が最先端技術を誇る核変換技術(廃棄物放射性物質を半減)が紹介された。

主催者であるエネルギーを考える未来塾の年間活動報告の後、放送大学講師で元東京大学大学院研究員の石口孝治氏が、「身の周りの放射能・放射線～過去・現在・未来～」と題して講話を行った。

過去5回被爆を経験している日本の現在の大地から及び食糧摂取による放射線量の比較や医療被曝の現状が紹介された後、福島原発事故のその後についての土壌汚染や農産物モニタリング結果について解説があった。

そして未来へと向けて、原子力利用にあたって安全最優先の姿勢と行動を示した原子力規制委員会の安全文化に関する宣言と行動指針が示された。

それを受けて、今回初めて地元の海辺の砂や土、日常口にする野菜などに含まれる放射線量を実際に測定するコーナーが設けられ、県内の女性団体の協力のもと、専用の測定器



図8 放射線測定の様子



図9 グループ毎の作業の様子

を使用して参加者が自ら放射線量を測定し、基準値と比べるなどしていた。

午後からは、学生・教員・主催団体会員・女性団体会員が6つのグループに分かれ、

テーマ1: 村に来る前の思いと来て見での感想

テーマ2: 今日の講演を聞いての感想

テーマ3: 私が考える未来のエネルギーについて

これら3つのテーマで意見交換を行なった。

前回同様、まずグループ毎に自己紹介した後、発表者と書記を決定した。今回は、各グ



ループに学生2名（1部3名）を配置し、教員は助言者ではなく参加者として加わり、幅広く団体からの参加者を入れて構成しており、全てのグループの発表者と書記は各グループの学生2名が自動的に役割を担う結果となった。ディスカッションでは、それぞれが自分の考えをポストイットに記入、それを皆に説明した後、発表者を中心にグループの意見としてそれらをまとめた。

学生から主に出た意見として、一部紹介する。

テーマ1: 村に来る前の思いと来て見ての感想

A グループ

- ・来る前は何もない所というイメージだったが、実際にはエネルギー関連施設が多く立地されていて近代的。

B グループ

- ・人は少ないが、やさしくて教育熱心だという印象を受けた。

C グループ

- ・六ヶ所は牧場や田んぼに囲まれた暮らしだと思っていたが、広大な土地に原子力施設がたくさん立地されていて驚いた。

D グループ

- ・荒涼とした大地とヤマセを連想していたが、風車がたくさんあり太陽光も進んでいる。

E グループ

- ・六ヶ所の人々はエネルギーについてあまり知識がないと思っていたがよく勉強していた。

F グループ

- ・なぜすごい辺りな所に原発なのかと思っ

ていたが、地域と一体化しており地域活性化になっていて納得。

テーマ2: 今日の講演を聞いての感想

A グループ

- ・安全文化は一朝一夕にはならず。

B グループ

- ・日本のエネルギーの現状を知り、ドイツとの比較で問題と課題を改めて考えさせられた。

C グループ

- ・エネルギー問題と同時進行で地球温暖化問題も考えなくてはいけない。

D グループ

- ・ドイツの再生エネルギーがうまくいっている報道があるが、正しい知識に基づいて考えることが大事。日本はドイツをまねるべきではないと思った。

E グループ

- ・地球誕生時から放射線はあり、昆布やワカメもいつも食べているので今日は勉強になった。

F グループ

- ・少しでも知識を得たり討論をする機会を拡大するべき。

テーマ3: 私が考える未来のエネルギーについて

A グループ

- ・すべてのエネルギーが共存していくのが理想。でも永久はない。

B グループ

- ・高速増殖炉、核融合エネルギーの実現。

C グループ

- ・化石燃料は温暖化になるので、原子力・



図10 発表の様子

再生エネルギー・水素・核融合。新しい技術で安全なエネルギー、例えば人間の日常的な運動から発電するなど。地熱・波などあらゆる資源を活用する。

Dグループ

- ・まず省エネ、電源の低炭素化と自然エネルギーの拡充。小さくても水力発電や石炭・石油以外を燃やす火力発電所。

Eグループ

- ・六ヶ所を世界一のエネルギー生産地にしていき、原子力文化の醸成・技術開発・

3 考

平成27年に初めて行なわれた事業であったが、主催者・参加者ともに手探り状態の部分が多かった。それを踏まえ、翌28年度は若干改善を図った。振り返って課題と成果を整理してみる。

〔課題〕

(1) 参加者

主催者である六ヶ所村の女性団体「エネル



図11 2016/9/5 デーリー東北記事

教育の推進を図る。

Fグループ

- ・資源のない日本は、コスト面から短期的には原子力、長期的には核融合。

などが挙げられた。

その後、6つのグループがそれぞれの意見をまとめた内容を学生が発表した。

察（課題と成果）

「エネルギーを考える未来塾」は平成24年に結成され、これまでもエネルギー事業者による研修や視察などを通してエネルギーに関する情報を集め、積極的に学習してきた経緯がある。その活動を通して交流があった他団体や教育機関への呼びかけで実施されたため、限定的な参加者に留まった。プログラム2日目のフォーラムは、エネルギーに関する基調講演もあり一般参加も可能であったが、主催団体

のネットワークを通じた関係者の参加が多かった。

それに比べ一般参加者が少なかった理由として、主催者によると、各参加団体との連絡調整に手間取り、一般への周知・広報に時間的余裕がなかったとのことであった。1年目より参加団体が増えた2年目の方が一般の参加が少なく、全体としての参加数を大きく減らした要因の一つではないか。

学生の参加に関しては、1年目は首都圏からとして埼玉から9名、隣接地域として函館から2名、地元として本学の学生18名が関わったが、人数・地域とも偏りがあった。それを是正するため、参加を募る地元の大学を増やし、2年目は埼玉から5名、函館から2名、そして地元の大学として前回に続き本学からの参加に加え、新たに弘前大学・青森中央学院大学・八戸工業大学のそれぞれ2名が参加した。助成金の限られた予算での活動で学生の数も限られ、より多くの大学から参加できたのはよかったものの、今後はもっと多くの学生の参加が望まれる。

## (2) 日時

参加者、特に首都圏からの参加者に都合のよい日程・時間帯を考慮して決定された。

特に学生の参加が核となる事業であるため、夏休みの後半が各大学は参加しやすいとのことで9月上旬に設定されたが、時期的に地元はイベント等が行なわれるため、一般の集客を考えれば検討が必要かもしれない。

## (3) 内容・進行

講演は1、2年目とも45分だったが、日本と世界のエネルギー事情、更に多面的な解説

を交えての説明だったためか、講師も限られた時間内で全てを説明しようと早口となり、内容の十分な理解には時間が短過ぎたとの意見が多かった。

大会運営等に不慣れな市民団体主催であり、資料配布やタイムスケジュールの配分・進行に工夫が必要である。遠方から参加者も多く、進行が遅れれば帰りの交通機関への影響もあることから時間厳守が求められる。講演や意見交換等もっと時間がほしかったとの声も事後のアンケートでも出ていたことから、全体のタイムスケジュールを見直し、スムーズな進行をするべきである。

1年目にプログラムの段取りの悪さを指摘する声が多かったことから、2年目は1日目の六ヶ所村内見学を除いてエネルギー関連施設のみとし、2日目のフォーラムでは六ヶ所村民によるアトラクションを取りやめた。その時間的余裕を、より多く講演やテーブルトークに振り分けた。そのトークでは、事前にグループ分けされたメンバーのみでの作業であったために、他の参加者からは自分もグループに入って意見交換をしてみたかったという声が聞かれた。

また、2日目のグループ編成に当たり、1年目は学生数名の中に主催団体メンバーが1人入って意見をまとめ、その際に助言者として学生を引率した教員が関わるという形であった。2年目は、学生・教員・主催団体・他の市民団体・電力事業者がそれぞれ1~2名ずつ入り、助言者として講演を行なった2人の講師、弘前大学の日景弥生氏と放送大学の石口孝治氏が全体をコーディネートした。これにより、前回より多様でバランスのとれたグループ構成となった。

## (4) その他

事業全体のテーマがエネルギーと専門的であり、講演内容の理解やディスカッションへの有意義な参加を考えれば、研修や事前学習の必要性を強く感じた。

また、開催地が六ヶ所村と地元以外は移動手段・時間等に事前調整が必要であり、参加者もそれぞれが互いに連絡がとりにくい状況での実施であったため、合同の打ち合わせを経て内容を共有してから開催した方が効率的である。

## 〔成果〕

1年目のアンケート、2年目の参加者への聞き取りから、事業の成果を記述する。

## (1) 講演について

- ・資料や画像を多く使用しての説明はとてもわかりやすく、日本や世界のエネルギーについて詳しく知ることができた。
- ・今までと違ったエネルギーの話が聞けて、改めてエネルギー政策のあり方、家庭での電力、再生エネルギーのメリット・デメリット、CO<sub>2</sub>排出量についてよい勉強になった。
- ・学生にとって、現在の日本のエネルギー事情、未来のエネルギー、そして環境についても考えるよいきっかけとなった。
- ・テーマについて多面的、総合的観点からの説明であり全体像がよくわかる内容だったので、せめて60分は説明の時間が必要、90分なら尚可。

## (2) テーブル・トークについて

- ・学生のグループに入り今回が初めてのエネルギーの話だと言っている割にはしっかりと意見を言っていた。

- ・もう少し長い時間をかけてテーブル・トークをしたかったと思った。様々な学生や年代の方とお話をするのができてとても楽しかった。
- ・学生中心なのでどうなるかと思ったが想像以上によくまとめられた。大人がいて意見を聞いたのもよかった。
- ・年齢、職種、地域を超え、いろんな方の意見を聞かせて頂き、とても勉強になった。
- ・一人一人の意見をしっかり聞いて言えたのでよかった。ただ時間が少なく話し合いを深めていけるまではできなかったのも、もっとこのグループで話し合いたいと思った。

## (3) 全体について

- ・今回の大会は、学生さん達と一緒にエネルギー事情と未来のエネルギーについて勉強してきたが、学生さんなりにとてもよい意見を持って発表していたのでよかったと思った。
- ・様々な立場の方の意見をこんなに聞く機会はないかなと思うので、貴重な体験ができて嬉しかった。もっと他の方々と交流できる時間があればもっと学びが深められたと思った。
- ・エネルギーに関して様々な人の意見を、色々な視点から聞きたいと感じた。また、政府がやっている策も知っておきたい。
- ・時間が短く感じたくらい。とても楽しかった。前日の六ヶ所見学も含めあつという間でした。もっとゆっくり見学やテーブル・トークをしたいと思った。

## (4) その他

- ・見学した時の事を一生懸命に説明してく



れたこと、とてもよかったと思う。

- ・大学生の意見を聞けるというのはとてもよい企画だと思う。
- ・年齢が高くなるとあまり発言したくないようだ。しかし電気については昔の事をよく話してくれなければ若い人はわからない。私も含めて気づかされた。
- ・多くのプログラムをうまくこなしていた。有意義な会でした。
- ・このような会を今後も行って下さい。参加させて頂きありがとうございました。

全体的に好意的な意見・感想が多く、事業の開催については昨年に引き続きおおむね好評であった。

エネルギーという、大切であるがなかなか考える機会のないテーマについて学ぶ事業ということで、日頃あまり深く考えずに電力等を消費している学生がどれだけ関心をもって参加するか心配であった。しかし、エネルギー関連施設の見学では熱心に案内者の説明を聞き、講演の最中にはメモをとり、テーブル・トークでは他の大学生や市民団体の方々と積極的に意見を交わし、最後の発表では自らグ

ループ代表としての発表役を買って出て、堂々と大勢の前でまとめた内容を発表した。エネルギーについて思ったより真剣に考えていることがわかったと同時に、授業や学科の活動で日頃接する学生の姿よりも頼もしく落ち着いた印象で、村役場や市民団体の参加者から多くのお褒めの言葉を頂いた。

そして何より強調したいのは、日頃世代間交流の少ない学生や女性団体のメンバーから、違う年代や立場の考えを聞く機会を感謝する声が多く上がったことである。この事業では、地域・年代・職業とまちまちの参加者が一体となって研修・交流し、互いの考えをまとめるという、他者とのコミュニケーションの絶好の機会でもあった。2日間という短い期間ではあったが、参加者全員にとってエネルギーという共通のテーマを通して自分達の生活や価値観を見直し、他者の意見に耳を傾ける貴重な体験となった。

この活動を通して、県外の大学、県内の市民団体や事業者との人脈を築くことができた。予算の制限等もあるだろうが、願わくばできるだけ多くの学生や市民にこのような体験をする機会の提供ができればと思った。

## 4 終わりに

内容や運営等細かい部分に課題を残した事業ではあったが、全体的に地方での事業としては目標を達成できたと思う。今後に向けて、より内容や対象、開催日時等に関して吟味し、発展可能な事業の実施に向けてプログラム内容を改善・検討していく必要がある。

日本にとっての重要なエネルギー基地としての位置づけとなる六ヶ所村に県内外の様々な年代・立場の人が一堂に会し、今後も未来のエネルギーについて共に学び議論を深めていくことを願っている。

## 参 考 文 献

- (1) 経済産業省資源エネルギー庁発行 エネルギー情報誌「さいくる アイ」No.1～No.4
- (2) 広報ろっかしょ 2015年10月号
- (3) エネルギーを考える未来塾アンケートまとめ